

図書ニュース

第4号

大阪府立北野高等学校図書館 2009.10.16 発行

「天高く馬肥ゆる秋」――しかし、ヒトは心も肥やさなければならぬ。育ち盛りの若い人は特にそうだろう。心を肥やすには、人類の知的遺産である書物を食するのが近道だ。というわけで、「読書の秋」。知的食欲を刺激するような本をいくつか紹介してみたい。

①高島俊男「漢字と日本人」(文春新書) 811-T4-1

日本語にはなぜこんなに同音異義語が多いのか？ 疑問に思ったことはないだろうか。子どもが家に帰ってきて、「お母さん、今日はじめてセイコーしたよ。」と言ったら、母親は喜ばばいいのか、怒ればいいのか？――「セイコー」だけでも、成功、性交、性行、性向、政綱、生硬、盛行、精巧、精工、製鋼、精鋼 etc と、十以上。このような例は無数にある。(漢字の本家中国語ではこんなことはありえない。) なぜこんな異常な事態になったのか。本書を読めばその原因がよくわかる。

「漢字かな混じり文」という不可思議な言語表記を持つ日本語。世界標準からすれば、これがどれだけ異様なことか、日本人はもう少し自覚的になったほうがよい。「日本語は畸形的な言語である」と筆者は言い切る。しかし、これを正常に戻そうとすると、「日本語は幼児化」し、「へたをすれば死ぬ。」(もうそうなりつつあるのかも知れないが。)

辛口のエッセイストとして人気の著者であるが、専門の中国文学者としての著作では、「李白と杜甫」921-T5-1、「水滸伝と日本人」923-T3-3 などがある。

②養老孟司「考えるヒト」(筑摩書房) 491-Y9-2

今や日本が世界に誇る文化となったマンガ、アニメ。しかし、なぜマンガやアニメが日本のお家芸になったのか？「漢字かな混じり文」という奇妙な言語を使用していること――これが日本人のマンガ好きの原因なのだと筆者は言う。日本人だけに現れる失読症に、「漢字」だけ読めなくなる、「かな」だけ読めなくなる症状があるのだという。つまり、「漢字」と「かな」では、それを読むときの脳の使用部位が違うということなのだ。日本人は外国人より、脳を広範囲に使って文章を読んでいるということなのである。それがどうしてマンガ好きにつながるのか、――あとは本書を読んでみてください。とにかく、「脳機能をフル回転させて読む」マンガの効能を世に喧伝した氏は、京都国際マンガミュージアムの初代館長もつとめた。脳科学ブームの火付け役でもあり、脳や身体の科学的知見をもとに独自の議論を展開している。他に、大ベストセラーになった「バカの壁」(新潮新書) 304-Y11-1、「いちばん大事なこと」(集英社新書) 519-Y6-1 など。

③池谷裕二「単純な脳、複雑な『私』」(朝日出版社) 491-I7-2

著者は、若手気鋭の脳学者。脳科学の分野にまた新たなスター誕生だ。本書は母校の高校生相手に講義した内容をまとめたもの。脳科学の最前線がわかりやすく解説されている。その中のネタの一つ。「手を見ればその人が理系か文系かわかる」という研究データがある。薬指と人差し指を比べ、人差し指が長かったら理系。ほとんど同じだったら文系。(みなさんも自分の手で確認してみてください。) これは本当か？嘘か？——統計データとしては、これは全く正しい。しかし、ここには統計のトリックがある。どういうトリックか、——あとは本書を読んでみてください。まあこういうふうな興味深い話題が満載で、一気に読んでしまいます。他の著書に、「進化しすぎた脳」(朝日出版社) 491-I7-1。

④茂木健一郎「思考の補助線」(ちくま新書) 104-M6-1

今やテレビで大人気の脳科学者。(先日もエグザイルと一緒に「モギザイル」と称して出演していた。ワルノリし過ぎ?) しかし、氏は大学入試問題でも人気者。その出題数は昨年度断然トップだろう。とにかく好奇心のカタマリみたいな人だ。本書でも現代のさまざまな知的課題に果敢にチャレンジしている。その知的情熱に触れるだけで、脳内のニューロンも活性化するだろう。他に、小林秀雄賞を受賞した「脳と仮想」(新潮社) 491-M13-3。また、今年桑原武夫学芸賞を受賞した「ここから、すべての場所へ」は、近日入る予定。

⑤原研哉「白」(中央公論社) 757-H2-2

著者は国際的に活躍しているデザイナーであるが、その文章には定評がある。昨年度、本書から東大はじめ数多くの大学入試に出題され話題になった。「白」とは何か? 「白があるのではない。白いと感じる感受性があるのだ。・・・白という感受性を探ることによって、僕らは普通の白よりももう少し白い白に意識を通わせることができるようになる。」一傍線部はどういうことを言っているのか100字以内で説明せよ、とこのまま国語の問題にしたいくなるような文章だ。「白」をめぐる考察が斬新な文化論となっている。

本校校舎をデザインした建築家竹山聖氏とも共同でいくつかの仕事をしている。そのあたりのことは前著「デザインのデザイン」(岩波書店) 757-H2-1 に詳しい。

⑥鷺田清一「じぶん・この不思議な存在」(講談社現代新書) 104-W2-1

ご存知、現大阪大学学長の哲学者。この人も、大学入試問題の常連。出題文に困ったときの「鷺田清一・山崎正和」、と入試出題者から言われている(らしい)。本書は若い人向けの哲学入門書。「自分探し」などと言われるが、そもそも「自分」とは探して見つかるものなのか? 探さなければならないような「自分」とはいったい何? ——秋の夜長、じっくり「自分」を見つめてみるのも、知の筋力強化に有効だろう。他に、「ちぐはぐな身体—ファッションって何?」114-W1-1、「死なないでいる理由」914-W5-2、「誰のための仕事」081-N4-1-9 など。最新刊「噛み切れない思い」は、近日入る予定。

⑦石原千秋「教養としての大学受験国語」(ちくま新書) 375-I14-2

受験問題(評論)から良問を選び、その解法を説く。受験参考書であると同時に、現代思想入門書ともなっており、評論読解に必要な知識・思考法を幅広く身につけることができる。この本一冊こなせばかなりな筋力アップになるはずだ。

以前3年生のある生徒にこの本を紹介したら、五日ほどで読み終え「ここの解答だけ納得できないのですが・・・」と持って来た。そこは明らかに著者の解答ミスと思われた。きみはその解答ミスとおぼしき箇所を発見できるかな?(ちなみに、その生徒は現役で東大に入学しました。)

他に、本書の姉妹編「**大学受験のための小説講義**」(ちくま新書) 375-I14-4、「**秘伝大学受験の国語力**」(新潮選書) 375-I14-7 など。

⑧平野啓一郎「本の読み方—スローリーディングの実践」(PHP新書) 019-H5-1

著者は、京都大学在学中に芥川賞を受賞して話題になった作家。忙しい現代人向けの「速読法」本は巷に氾濫しているが、本は速く読めばいいというようなものではない。著者は「一冊の本を丹念に読んだほうが、人生にとってはるかに有益だ」とする。情報が氾濫する時代だからこそ「スローリーディング」の大切さを主張する。夏目漱石「こころ」、森鷗外「高瀬舟」、三島由紀夫「金閣寺」など豊富な例文をとりあげて、実践的に読み方をレクチャーする。著者の小説最新作「ドーン」は、近日入る予定。

⑨新宮一成「夢分析」(岩波新書) 145-S6-1

北野O Bの精神医学者。現京都大学教授。だれもが見るような「空を飛ぶ夢」、「墜落する夢」、「追いかけられる夢」などは、いったいどういう意味を持つのか。豊富な実例をあげながら夢の本質に迫っていく、その手際はなかなかスリリングだ。「夢見がち」な人におすすすめ。本書を読んだあとでは、夢の見方が変わってくるだろう。他の著書に「**ラカンの精神分析**」(講談社現代新書) 146-S2-1、「**無意識の組曲**」(岩波書店) 146-S2-2。

精神分析に興味のある人は、フロイトの「**精神分析入門**」(新潮文庫他)あたりから読むのもいいだろう。私も高校時代に読み、目から鱗がいっぱい落ちた覚えがある。

⑩「女が読む太宰治」(ちくまプリマー新書) 910-T45-1

今年生誕100年を迎えた太宰治。いつときは「今さら太宰なんてダサイ」といった風潮もあったが、今また若い人たちにダザイがひそかなブームなのだという。不死鳥のようによみがえる太宰治とはいったい何者なのか?——本書では、各界で活躍中の女性たちによる「太宰体験」がつづられる。執筆陣は、女優佐藤江梨子、漫画家辛酸なめ子、精神科医香山リカ、プレカリアート活動家雨宮処凛、太宰の愛人の娘である作家の大田治子など。いずれ劣らぬ個性派の面々ゆえ、その読み方も各人各様。辛酸氏は「**人間失格**」をとりあげ、この本は「女性扱いのテクニク」を伝授する実用本でもある、と喝破している。主

人公の「おもしろキャラだけど屈折したところ」や「孤独オーラ」が女心をくすぐりモチまくるのは、現代のお笑いブームに興じる女性たちの心性にも通じ、まるで「予言書」のようだ、と書いている。そうか、「人間失格」は「女性にモテる法」を指南するハウツー本でもあったのか、だから今でも売れ続けているのか、とヘンに納得した。――多様な読みが可能だからこそ、時代を越えて読み継がれるのだろう。それが名作の所以でもある。

太田治子「**明るい方へー父太宰治と母太田静子**」は、近日入る予定。

⑪ ジョージ・オーウェル「一九八四年[新訳版]」高橋和久訳（ハヤカワ epi 文庫）

純文学としては驚異的なベストセラーとなった村上春樹の小説のタイトル「1Q84」913-M60-13-1 は、もちろんこのオーウェルの小説のタイトルを意識したものであり、「1Q84」に登場する得体の知れない存在の「リトルピープル」は、「一九八四年」の姿を見せない独裁者「ビッグブラザー」のもじりである。（この命名に、村上春樹の現代社会に対する批評がこめられていよう。）「1Q84」が後世に残る傑作となるかどうかは未知数だが、オーウェルとチェーホフの名を改めて我々に注目させてくれた功績は大としなければならぬ。名のみ聞いていて未読であった本書を読む気にさせてくれたのは、まったく「1Q84」のおかげである。イギリスでも「読んだふりをする本」の第1位が「一九八四年」だそうである。（日本の「吾輩は猫である」みたいなものか。）

1949年に発表された本書は、近未来SF小説として話題を呼んだが、1984年をはるかに越え21世紀に突入した今となつては、どうしても賞味期限切れの作品、といった先入観を持ってしまう。ところがどうして、本書はそんな底の浅い作品ではなかった。この小説の射程ははるかに深い。現代でこそ読まれるべき作品だ。

発表当時この小説は、全体主義を風刺した作品として読まれ、アメリカではソ連批判のプロパガンダに利用されたという。我々の学生の頃も、この作品は、政治的・イデオロギー的観点から多く話題にされていた。不幸にも本書は何十年にもわたり、そうした政治の色眼鏡を通してしか読まれてこなかったのだ。だが今、ようやく純粹に小説として読まれるべき時期が到来したといえる。「2001年宇宙の旅」が映画の不朽の名作であるように、「一九八四年」も小説の不朽の名作として読み継がれていくにちがいない。

⑫ たか の て る こ 「淀川でバタフライ」(講談社文庫)

著者は北野OGのエッセイスト。(橋下知事の一学年下で、水泳部。)デビュー作の紀行エッセイ「**ガンジス河でバタフライ**」914-T57-1が話題となり、テレビドラマ化もされた。(主演長澤まさみ)。その原点は、高校時代十三大橋下の淀川でバタフライしたことにある、と筆者は言う。なぜ、あんな汚い川で泳ぐはめになったのか?――それは読んでのお楽しみ。(マネしないようにね。)本書は、「爆笑日常エッセイ」と銘打たれているが、思い切り笑えて、とにかく元気の出る本です。勉強の息抜きにどうぞ。ただし、電車の中などで読むのは禁物。ニタニタ笑い出して、周りの人に不気味がられることまちがいないし。